



HOME

ご挨拶

開催概要

プログラム

日程表

開催概要

学会名称	: 第47回日本医学教育学会大会
会期	: 2015年(平成27年)7月24日(金)、25日(土)
会場	: 朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター (新潟市中央区万代島6-1)

O-7-2

学生は授業時間の短縮をどのようにとらえているか。～授業時間を90分から60分に変更して～

How students are feeling by shortening the lecture time.

○森 淳一郎, 清水 郁夫, 黒川 由美, 多田 剛
(信州大学医学部医学教育センター)

Junichirou MORI (Center for Medical Education, University of Shinshu, Matsumoto, Nagano, Japan)

医学部認証に向けて、多くの大学において急激な医学教育改革が進められている。こうした中、本学では講義型授業の時間を従来の1回90分から1回60分に短縮し、平成24年から一部の学年で実施した。「授業時間の短縮は学生の学力低下を引き起こさない」と及び「学生は授業時間を必ずしも歓迎していない」とは第25回日本医学教育学会大会において発表させていただいたが、学生がどの程度授業時間の短縮を重くとらえているかは不明であった。【目的】今回私たちは、学生が1回の授業時間が短縮されることをどの程度重くとらえているかについて調査したのでここに報告する。【方法】60分授業を受けている学生234人(4年次生112名、3年次生122名)を対象に1. 授業を担当する教員の数、2. 教員の話し方、3. 授業において大事なポイントを強調するか、4. 授業時間、5. 講義形式の5点について学生がどの項目を重視しているかをコンジョイント分析により解析した。【結果】学生は、教員の話し方および授業において大事なポイントが強調するかを重要視していた。これらの項目に比べ、授業時間が学生にあたえる影響は小さかった。この傾向は、短縮授業初年度である4年次生を単独で解析しても変わらなかった。【結論】学生は授業時間が60分から90分かはあまり問題にせず、教員がリズミカルに講義を行い、大事なポイントを強調してくれることを望んでいる。

O-39-6

1 診療チームに1学生を配置するクリニカルクラークシップに向けた出張医学教育FD

'FD for delivery' toward clinical clerkship staffing one student to one clinical team

○多田 剛, 森 淳一郎, 黒川 由美, 清水 郁夫
(信州大学 医学部 医学教育センター)

Tsuayoshi TADA (Center for Medical Education, Shinshu University School of Medicine, Nagano, Japan)

【目的】本学で診療参加型臨床実習を実現するためには従前の見学型臨床実習で育った医師に学生の指導を依頼する必要がある、彼らの理解と協力が不可欠となる。そこで、我々は学生が診療チームに無理なく溶込めるように1診療チームに1学生のみを配置する新しい診療参加型臨床実習を企画するとともに、その説明のために学生を派遣する病院に出張してFDを行なうこととした。【方法】本学では県内の33教育協力病院と協定を結び、従来の6年次の3ヶ月間に実施してきた診療参加型臨床実習に加えて、5年次にも6ヶ月間4週毎の診療参加型臨床実習を行なう体制を全県下に整備した。指導医に新しい臨床実習が必要な背景や実施方法を説明するために各病院に出張して医学教育FDを行い、講演前後にアンケートを実施した。【結果】平成27年3月末現在、出張医学教育FDは25病院で2回、8病院で1回実施した。受講者は延べ1693名だった。FDを実施したことで、受講者らに今の日本の医学教育に改革が必要なことと学生には教育協力病院での臨床実習が必要であることへの理解が広がった。しかし、彼らがFDに耐えられる時間は30分だった。このためFDを分割する必要がある。彼らには学生は臨床実習にはすべて学んでから来るべきだという意識が強かった。病院長らは病院全体が活気づくことから学生の受け入れに積極的だった一方で、現場の中には負担が増すと考える医師が多かった。【結論】教育協力病院の医師に新しい臨床実習を理解してもらうには出張医学教育FDは必須であり、特に現場の医師の理解を得るには複数回の実施が必要だった。新しい臨床実習は病院の活性化や卒業生が学生実習で訪れた病院に初期研修医として就職する事例があり、受け入れ病院にも満足される成果が見られた。

O-12-1

医学科初年次教育に英語版「Human Biology」を用いたグループ学習主体のヒト生物学の授業の試み

New style of the group education with Human Biology for the first year students in Shinshu University School of Medicine

○黒川 由美¹, 清水 郁夫¹, 森 淳一郎¹, 多田 剛¹, 加藤 善子²
(¹信州大学 医学部 医学教育センター, ²信州大学高等教育研究センター)

Yumi KUROKAWA (Center for Medical Education, Shinshu University School of Medicine, Nagano, Japan)

【目的】信州大学医学部では入試科目に生物学がなく、高校で生物学未履修の入学者が存在する。また「ヒト生物学」の授業は日本語版「Human Biology」の各章が複数の医学部教室に割り当てられていたため講義に一貫性がなく、さらに曖昧な総括的評価により全員合格となり、必修科目としての役割を果たせずにいた。我々は医学科初年次教育に英語版教科書を用いたグループ学習主体の新たな授業を試みたので報告する。【方法】医学科1年生123名が4月より受講する「ヒト生物学」において教科書としてSylvia S. Mader著 英語版「Human Biology 13th edition」を用い、さらに1年次生が講義内容に興味を持つようにシラバスのGIOの記述に工夫をした。授業は毎週月曜日2限目(90分間)とし、始業直後に5分間のミニテストを実施し、その結果は成績評価の一部とした。次にグループ学習(1グループ6名前後)に移行し、30分間で前週にグループ内で分担した予習部分を各自5分間で説明し、次の20分間で教員が用意した課題にグループで取り組み、最終の20分間で学年全員の前で代表者が課題について発表した。成績評価は前期・後期とも「中間試験と期末試験を各30%、ミニテスト総点40%」とし、60点未満を不可とした。【結果】高校で生物学未履修の10名が前期合格基準を満たさなかったため合否保留とした。彼らを対象に6回の補講の後に再試験を実施したところ、全員が合格基準を満たした。後期は5人が合格基準を満たさず留年となった。アンケートでは「この授業をきっかけに教員の人柄を良くも悪くも知った(93.6%)」「授業中に居眠りをした(22.2%)」「この授業に遅刻をした(26.9%)」であった。また「授業中に嫌な思いをした(48.8%)」であり、グループ学習で気分を害したり、怠ける学生にうんざりしながらも、そんな自分の気持ちを処理し上手くやっていくということも、1年次生はこの授業から学んだことが覗えた。

血液形態自己学習用eラーニング教材開発の試み

E-learning system for self-study of peripheral blood smears in hematology

○清水 郁夫¹, 中澤 晃大², 田沼 奈津紀³, 石田 文宏³¹信州大学 医学部 医学教育センター, ²信州大学 医学部 保健学科 検査技術科学専攻, ³信州大学 医学部 保健学科 病因・病態検査学)

Ikuro SHIMIZU (Center for Medical Education, Shinshu University School of Medicine, Nagano, Japan)

【背景】血液細胞標本は、血液学において最も基本的でありながら診療において重要な情報を提供する検査である。自動細胞分析装置が普及した現在でも熟練した検査技師や医師の鏡検を要する場面は多く、検査技師や医師養成の学習過程において、血液形態に関する知識及び基本的技能の習得が卒前教育で求められている。一方で、血液形態に関する実習は、少数の教員が多数の学生を直接鏡検下で指導する形式が主体であり、人的制約や機材の物理的制約から十分な学習時間をとることが難しい。実習にe-learningを組み合わせて反転学習として利用することで、学習環境が改善する可能性がある。【方法】学内に既存のmoodleベース学習管理システム上に、正常血液細胞の血液形態自己学習のためのeラーニングシステムを構築した。本学血液内科で所有する末梢血塗抹標本をデジタル化し、各15分程度のインストラクションと練習問題のモジュールを作成した。平成26年度後期に本学保健学科検査技術科学専攻2年生39名、3年生39名が本システムを受講し、その後2年生は鏡検実習を6時間、3年生は15時間受講した。結果を5段階尺度によるアンケートで評価した。【結果】アンケートでは、分量について71.5%が「ちょうどいい」、19%が「やや少ない」と回答したが、3年生では分量が不足しているとする回答が33%に達した。写真の見やすさについて79.5%が肯定的に回答し、全員が学習に役だったと回答した。【結語】病理組織学の分野ではe-learningの導入が進んでいる一方で、血液細胞形態学においてはまだ知見が乏しい。今回の評価結果からは、血液領域でもe-learningが有用である可能性が示唆された。今後、受講者に合わせた難易度や分量の調整を実施すると共に、医学部の臨床実習や生涯学習等に活用するためのニーズ把握を行っていく。

ワールドカフェ風faculty developmentによる診療参加型臨床実習の到達目標策定

Establishment of clinical clerkship outcomes with the world cafe-like faculty development programs

○清水 郁夫¹, 黒川 由美¹, 森 淳一郎², 森田 洋², 多田 剛¹¹信州大学 医学部 医学教育センター, ²信州大学医学部附属病院 卒後臨床研修センター)

Ikuro SHIMIZU (Center for Medical Education, Shinshu University School of Medicine, Nagano, Japan)

【背景】診療参加型臨床実習の導入に伴い、臨床実習環境は多様化している。本学の臨床実習は大学附属病院以外に県内外30以上の教育協力病院が主な実習の場となることから、質の高いアウトカム基盤型実習を実現するためには、施設や診療科を超えて多くの指導医が到達目標に主体的に関わり、共有することが必要である。【方法】臨床系領域の到達目標を策定するfaculty development(FD)について、アクションリサーチの手法で短期的に検討を加えた。評価として、5段階尺度および自由記載からなる参加者アンケート結果と、ファシリテータによる事後検討結果を用いた。【結果】平成26年9月～27年2月にかけてFDを5回実施した。30施設から延べ118名の指導医が参加し(大学50名、教育協力病院68名)、82名(73.2%)は臨床研修指導医講習会で到達目標を考案した経験があった。当初のFDは一般的なワークショップに準じて、(1)診療科毎のグループに分かれ、ファシリテータと共に自由な討議を行う、(2)続いて全体での仮発表を挟んで修正を加える、(3)最終的に各領域の目標を発表し完成する、という流れで行った。2回目までの評価で「プログラム全体の統一性」や「他の医師との意見交換」などが必要な点として浮かび上がったことから、3回目以降ではワールドカフェ(WC)風の形式を探り入れるよう変更した。すなわち、仮発表の後で1名を残してグループを組み直し、他科の医師と共に討議を深めるようにした。アンケートの回答を改変前72名、改変後40名から得た。尺度の平均値を改変前後で比較したところ、作成した到達目標の妥当性は3.77→4.00(p=0.017)、本FDの達成度は3.61→4.05(p=0.001)と、それぞれ有意に改善が見られた。【結語】多様化する実習環境でアウトカム基盤型教育を実現するために、本形式での到達目標策定は有用であることが示唆された。

医学教育に対する学生の参画の実態

Realities of student participation for medical education

○奥野 衆史, 桑原 蓮, 藤井 麻梨子, 市川 喜理, 山田 潤一

(全日本医学生自治会連合)

Shushi OKUNO (All-Japan union of medical student's union, Tokyo, Japan)

【目的】ここ数年、カリキュラム作成の会議に学生が参画するようになった大学が増えている。また、医学連が2014年に行った医学教育アンケートでは、カリキュラムの大幅な改定を受けて、「学生の意見を医学教育にもっと反映してほしい」といった声が多く集まっていた。これを受けて、カリキュラム作成への学生の参画状況とその当事者である学生の意識を調査した。今回の発表では、調査結果とともに、カリキュラム作成への学生の参画の課題と展望を報告する。【方法】全国の医学部学生自治会や学生代表者の協力のもと、医学生を対象に実態調査を実施した。調査内容は、カリキュラム作成の会議にどのような学生が何人参加しているか、学生の声は反映されているか、大学側への要望、参画するようになってからの学生の変化、などである。【結果】カリキュラム作成への学生の参画が進んでいる15大学からの結果を得た。全国的に学生が実際に会議の構成員となっている大学は少なかった。学生自治会が作成した要望書を提出することのできる大学では、学生の意見が反映されているかどうか分からない、といった声が集まった。大学ごとに実態にばらつきはあるが、全体として学生の中でカリキュラム作成への学生の参画に実感を持っていないという声が多く集まった。【結論】カリキュラム作成への学生の参画が進んできているが、学生の中ではその実感を持っていない現状がある。学生の医学教育についての理解を深めるとともに、学生の声を反映する医学教育のシステム作りが必要と考えられる。カリキュラムの大幅な改定が進んでいる中で、医学生からも意見を集めカリキュラムに反映することは重要だと考えられる。医学連として、学生の声を広く集める学生自治会活動の発展を目指す。同時に今後の医学教育の質の改善のために、学生教員双方の話し合いの場の保障がなされていくことを期待する。